様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１６Ｋ０１４９８

研究課題名（和文）ペアレント・トレーニング保育士版の効果と普及に関する研究

研究課題名（英文）Research on the effectiveness and popularity of parent training for nursery teachers

研究代表者
十枝　はるか（Umemoto-Toeda, Haruka）

群馬大学・大学院保健学研究科・講師

研究者番号：３０３８０８３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：研究者（作業療法士）は保育士向けのペアレント・トレーニング保育士版（ティーチャー・トレーニング）を行い、その受講者をインストラクターとして養成した。作業療法士によるティーチャー・トレーニングと、養成された保育士が行うティーチャー・トレーニングの効果を比較した結果、両方ともに有意な効果が認められた。特に、対象児の「注意の問題」に関する行動は、実施前後で有意に改善された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
作業療法士が行うティーチャー・トレーニングは効果的であり、作業療法士によって養成された保育士もまた、ティーチャー・トレーニングのインストラクターとして同等の効果を発揮することが示された。これは、保育士が保育の現場で効果的なティーチャートレーニングを行えるようになることを意味し、発達障害の早期発見とそれ同時に早期支援を保育現場で開始できる地域づくりに貢献する可能性があることを示している。

研究成果の概要（英文）：The researcher (occupational therapist) conducted a parent training for nursery teachers (teacher training) and trained the participants as instructors. The results of comparing the effects of teacher training by occupational therapists and teacher training conducted by trained childcare workers showed that both had significant effects. In particular, the behavior of the target children related to "attention problems" improved significantly before and after the implementation.

研究分野：作業療法

キーワード：作業療法　発達障害　保育士

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、社会問題となっている子ども虐待、不登校、ひきこもりの背景には、発達障害が関連することが少なくないことが明らかになっている。被虐待児の報告では、あいち小児保健医療総合センターの子ども虐待専門外来を受診した被虐待児 1,036 名のうち自閉症スペクトラム（以下、ASD）や注意欠陥多動性障害（以下、AD/HD）などの発達障害を有していた子どもは 53%に上った [1]。不登校児に関しては、下関市の小児科医を受診した不登校児 79 名のうち 34 例（43.0%）に発達障害が関与していた [2]との報告があり、宇都宮市教育センターは不登校をきたした発達面で困難さを抱える子どもは小学生で 36%，中学生で 35%であった [3]と報告している。厚生労働科学研究報告書には、ひきこもり 125 件中 41 件（32.8%）に ASD や知的障害などの発達障害と診断された [4]とある。これらのケースは、ほとんどがこれまで未診断であり、療育や特別支援教育を受けた経験のない子どもたちである。

発達障害者支援法の施行以後、各自治体で早期発見の取り組みはされている [5][6]が、専門機関や専門家による支援体制が十分に整えられない地域もあり、発達障害の早期発見・早期放置の現状 [7]も否めない。このような現状を踏まえ、作業療法士（以下、OT）である研究代表者は、長崎県において発達障害の早期発見者になりうる保育所の保育士を対象とし、ペアレント・トレーニング保育士版（以下、ティーチャー・トレーニング）を実施して効果を示し、子どもの生活の場である保育所において支援が開始できる生活モデル型の発達支援を行う OT の役割を果たしてきた [8]。

ペアレント・トレーニングとは、心理学の研究成果を活用した行動療法に基づき、不適切な行動を減らし適切な行動を促すための心理社会的治療である。子どもの行動改善に効果があることが数多くの研究 [9][10]により明らかにされている。実施形態は、1～2 名のインストラクターが小集団の親を対象に行うペアレント・トレーニングが主流になってきている（図 1）。研究代表者らは、このペアレント・トレーニングを、子どもにとって親と同等の役割を担う保育士へ応用したのだ。

このたび、研究フィールドを長崎県から群馬県へ移し、OT によるティーチャー・トレーニングを用いた間接的支援で発達障害の可能性のある子どもの行動改善が示し、OT によるティーチャー・トレーニングを受けた保育士自身をインストラクターとして養成し、その保育士が他の保育士を対象としたティーチャー・トレーニングを実施しても同じ効果が示せるのか調査する。ティーチャー・トレーニングの質を維持し、更なる普及を目指し、発達障害の地域における早期支援体制づくりの実現へ展開していきたい。

図 1.ペアレント・トレーニング実施風景

２．研究の目的

１）OT である研究代表者が保育士を対象としたティーチャー・トレーニングを 6 年 実施し、その効果を発達障害の可能性のある子ども（対象児）1 名に対し①保育士へ質問紙「ASEBA 行動チェックリスト保育士用（C-TRF）」[11]への記入を求め、②「気になる」行動に対する保育士の主観を評価指標「カナダ作業遂行測定（COPM）」[12]で測定し、改善するかを調査する。

２）OT によるティーチャー・トレーニングを受けた保育士が、他の保育士を対象としたティーチャー・トレーニングを実施しても、子どもの行動が改善するかを同じ研究デザイン、同じ効果測定法を用いて 1 年調査する。

３．研究の方法

群馬県 B 市，C 市，D 市内の保育所等に在籍し、発達障害の可能性のある子どもを担当する保育士を対象に、約半年にわたるティーチャー・トレーニングを実施した。効果測定には、①ペアレント・トレーニングの効果判定に国際的に使用され保育士等が回答することで標準化されている質問紙 C-TRF と、②対象者の対象児の「気になる」行動に対する「重要度」「遂行度」「満足度」を 10 段階で評定測定する評価指標 COPM を用いた。

研究 1:

B 市においては 2017～2019 年の 3 年間（計 4 回）、C 市においては 2019～2022 年の 4 年間（計 4 回）、D 市においては 2020～2023 年 3 年間（計 3 回）OT である研究代表者が実施しその効果について調査した。

研究２：

2023 年度は前年度までに OT によるティーチャー・トレーニングのインストラクター養成講座を受けた C 市の保育士が計 2 回実施し、その効果について調査した。

研究デザイン：

OT もしくは養成された保育士がティーチャー・トレーニングを実施する期間をティーチャー・トレーニング実施期とし、その期の前後に約 1 月のベースライン期を設け、各期の前後、すなわち、ベースライン前、実施期直前、実施期直後、ベースライン後の計 4 回効果測定を行う（図２）。研究 1 と研究 2 のそれぞれの効果が同じか検討する。なお、各回の測定値は、Wilcoxon の符号付順位検定により有意確率を算出し、5%未満を有意とした。

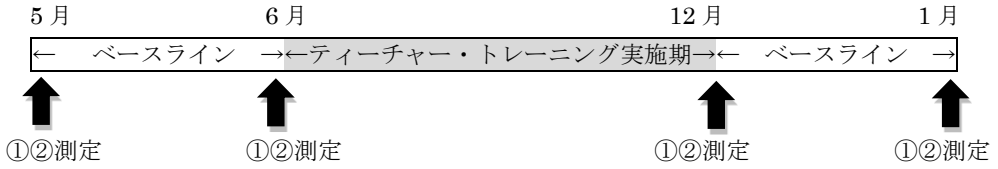

図 2. 研究 1，研究 2 のデザイン

実施内容：

ティーチャー・トレーニングは、1～2 名のインストラクターが 10 名程度のグループに実施する、1 回 60～90 分、全 10 回を隔週で実施する、約半年にわたる参加的・対話的学習である。各回のテーマに沿って学習し、対象者はセッションに参加するだけでなく毎回出されるホームワークを各保育所等において「気になる」行動を有する児へ実施する。毎回、ホームワークの報告に基づき気づいたことを話し合い、互いの頑張りを称賛し辛い場面を共感し合う「グループの凝集性」を大切にしていく。このような対象者の安心と安全が保障できる環境の下、児の行動と自分の対応や児の行動に対する感じ方を客観視し、児の行動のとらえ方を拡大し、ほめ方や指示の出し方等のスキルを学び、すぐに現場で意識しながら実践し振り返り、児に合った対応を見つけ、対象者が確実に児を支援できる方法を身につけられるプログラムである。

表 1. ティーチャー・トレーニング実施内容

	内　容	■ホームワーク
1	オリエンテーション，子ども紹介	行動観察シート
2	子どもの行動の観察と理解	行動観察シート
3	子どもの行動へのよい注目の仕方	行動の３つの類型分けシート
4	類型分けシートのフィードバック	行動の３つの類型分けシート
5	スペシャルタイムとプラスのほめ方	スペシャルタイム， ほめ方シート
6	スペシャルタイムのフィードバック	スペシャルタイム ほめ方シート
7	子どもが達成しやすい指示の出し方	指示反応シート
8	トークン（ごほうび）システム	指示反応シート トークンシステム
9	全体のまとめと，修了式	

４．研究成果

１）対象者研究 1 および研究 2 の対象者と対象児は、それぞれ表 2, 表 3 の通りである。

表 2. 研究 1 の対象者と対象児

	研究１	研究２
保育士および幼稚園教諭		
性別（女性/男性，%）	31/1 （96.88/3.13%）	6/0 （100/0%）
経験年数（平均±SD）	16.46±6.64	13.28±8.37
対象児		
性別（女児/男児，%）	8/24（25/75%）	2/4（33.33/66.67%）
年齢（平均±SD）	4.32±1.18	4.58±0.66

２）C-TRF の結果

研究 1 および研究 2 の C-TRF 下位指標「注意の問題」の平均値の推移は、それぞれ図 3, 図 4 の通りである。どちらも、1 回目と 4 回目で有意に低下した（研究 1:P＝0.004, 研究 2:P=0.042）。

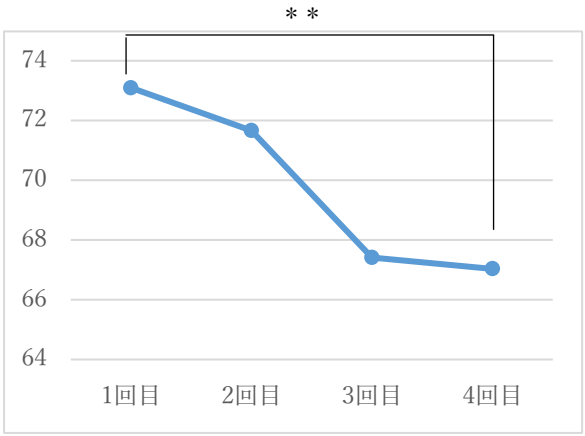

図 3.「注意の問題」（OT 実施）推移

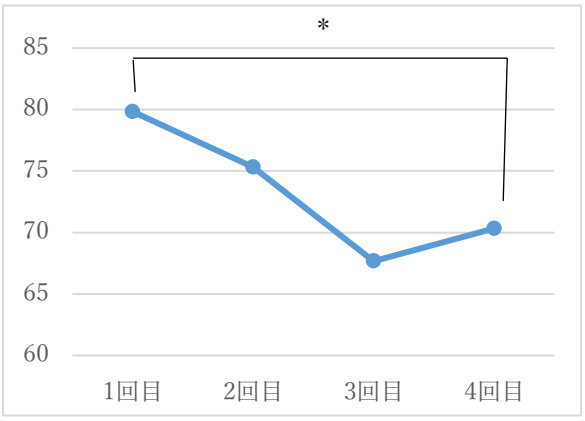

図 4.「注意の問題」（保育士実施）推移

研究 1 および研究 2 の C-TRF の会指標「攻撃的行動」の平均値の推移は、それぞれ図 5, 図 6 の通りである。どちらも 2 回目と 4 回目（研究 1：P=0.033, 研究 2：P=0.043）、1 回目と 4 回目（研究 1：P=0.005, 研究 2：P=0.027）で有意に低下した。

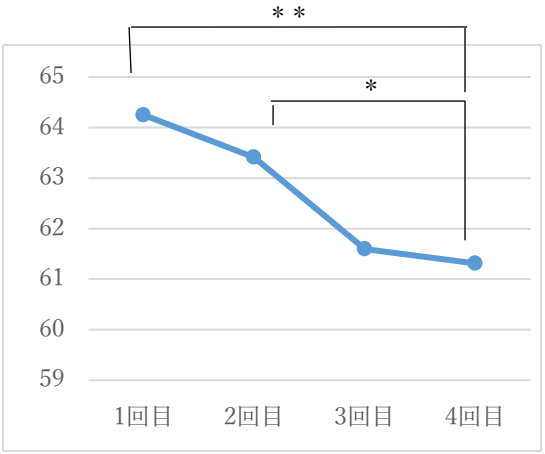

図 5.「攻撃的行動」（OT 実施）推移

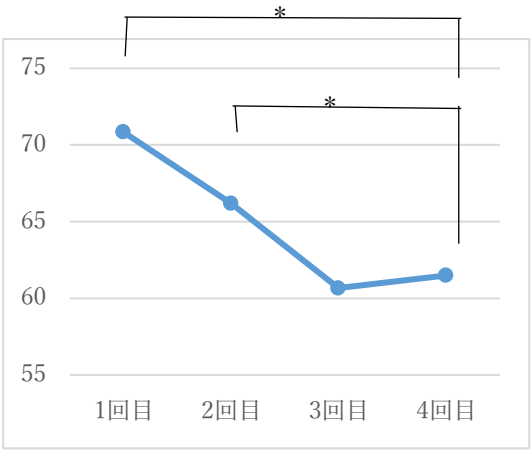

図 6.「攻撃的行動」（保育士実施）推移

3）COPM の結果

研究 1 および研究 2 の COPM の「遂行度」の平均値の推移はそれぞれ図 7, 図 8 の通りである。どちらも 2 回目と 3 回目で有意に向上した（研究 1：P=0.00, 研究 2：P=0.046）。ただ、研究 1 のみ 1 回目と 2 回目での有意に向上した（P=0.001）。

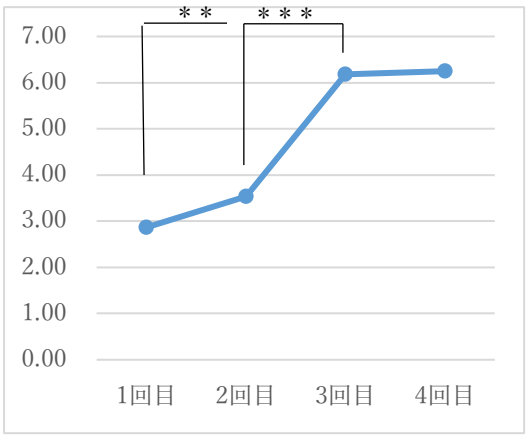

図 7.「遂行度」（OT 実施）推移

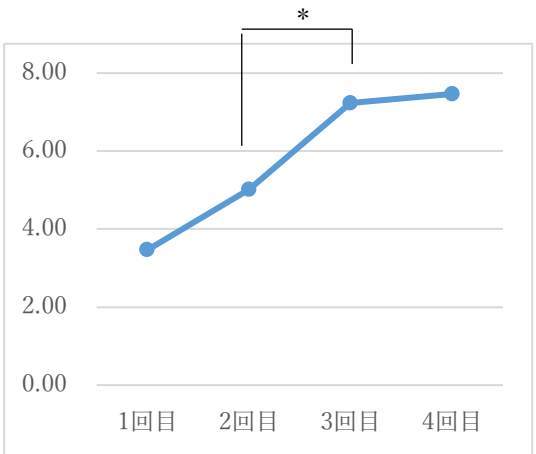

図 8.「遂行度」（保育士実施）推移

研究 1 および研究 2 の COPM の「満足度」の平均値の推移はそれぞれ図 9，図 10 の通りである。どちらも 2 回目と 3 回目で有意に向上した（研究 1：P=0.000，研究 2：P=0.043）が、1 回目と 2 回目でも有意に向上した（研究 1：P=0.045，研究 2：P=0.028）。また、研究 1 のみ 3 回目と 4 回目でも有意に向上した（P=0.032）。

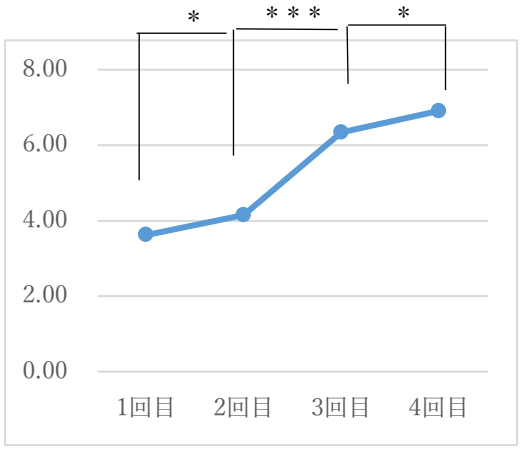

図 9.「満足度」（OT 実施）推移

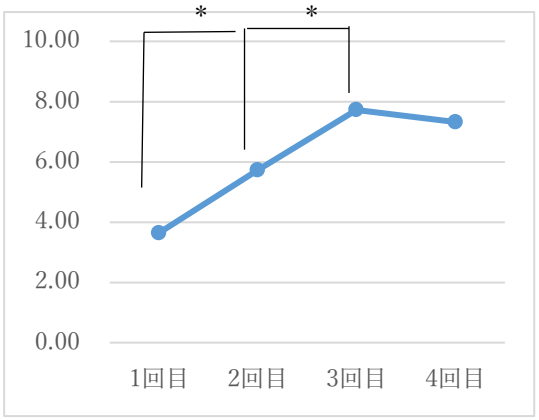

図 10.「満足度」（保育士実施）推移

５．文献

1) 杉山登志郎：そだちの凸凹（発達障害）とそだちの不全（子ども虐待）．日本小児看護学会誌 20(3)：103-107，2011
2) 金原洋治：不登校事例の背景にどのくらい発達障害が関与しているかー発生頻度と対応についてー．日小医会報 33：115-118，2007
3) 宇都宮教育センター：http://www.ueis.ed.jp/futoko/taisaku_pdf/090114_hoshin.pdf
4) 近藤直司：青年期のひきこもりと発達障害．50(4)：285-291，2010
5)長訓子，松坂哲應，柿田多佳子，岩永竜一郎，十枝はるか：長崎県における 1 歳 6 ヵ月健診での自閉症児スクリーニング精度向上に向けた取り組み．長崎県作業療法研究，3(1)8-12，2006
6) 岩永竜一郎，松坂哲應，日野出悦子，十枝はるか：3 歳児健診における新項目導入の効果．第 44 回日本作業療法学会 P185,2010
7)西海市健康づくり課：ティーチャー・トレーニングに関するデータ提供．2011
8)十枝はるか，岩永竜一郎，津本保宏，泉　純子：ペアレント・トレーニング保育士版の効果に関する研究～2011 年度の報告～．第 47 回日本作業療法学会:P264-Rc，2013
9) Anastopoulos ,A. D., Shelton, T. L., DuPaul, G. J., Guevremont, D. C. : Parent Training for Attention-Dificit Hyperactivity Disorder: Its Impact on Parent Functioning. Journal of Abnormal Child Psychology 21(5) : 581-594, 1993
10)Reddy, L., Braunstein, D., Springer, C., Bartik, C., Hauch, Y. et al. : Randomized Trial of Three Child / Parent Training Groups for ADHD Children. Annual Conference of the American Psychological Association 110 : 22-25, 2002
11)船曳康子，村井俊哉：ASEBA 行動チェックリスト（CBVL/11/2-5:保護者用および C-TRF:保育士用）標準値作成の試み．児童青年精神医学とその近接領域 58(5):713-729,2017
12)Law M.,Carswell A.,Polatajko H.,Baptiste S.,McColl M.(著)，吉川ひろみ(訳):COPM―カナダ作業遂行測定．第 4 版，大学教育出版，東京，2006

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Ken Kondo, Siyeong Kim, Naoto Noguchi, Ryoto Akiyama, Haruka Toeda, Ryoto Yanai, Kazura Kobayashi, Waka Murata, Bumsuk Lee	４．巻 未定
２．論文標題 Predictive value of social-cognitive function in physical restraint use in older patients: a cross-sectional study	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Kitakanto Medical Journal	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 横井 千恵, 十枝 はるか
２．発表標題 育児不安解消に向けた幼児社会性発達早見表の試作
３．学会等名 日本作業療法学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 十枝はるか, 早川穂南
２．発表標題 発達障害児の自己評価ならびに他者評価の研究ー「小学生版QOL」, 「PART」, 「動的家族画」を用いてー
３．学会等名 日本LD学会第28回大会（東京）
４．発表年 2019年

１．発表者名 六本木温子, 1小澤 恵, 河合健人, 十枝はるか, 吉岡和哉
２．発表標題 群馬県における母子保健領域への作業療法士の活用・連携に関するアンケート調査報告
３．学会等名 日本作業療法学会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

2021年3月19日　群馬テレビ「ビジネスジャーナル」というテレビ番組にコメンテーターとして出演し、ティーチャー・トレーニングの内容を説明した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関